

パラリンピックと放送に関する研究について(2) —パラリンピック放送による「身体に対する一元 的な価値意識の再生産」に関する一考察—

中山健二郎

はじめに

今日、人々はメディアを介することで日常的にスポーツを享受している。笹川スポーツ財団(2016)の調査¹⁾によれば、過去1年間で、会場で直接スポーツを観戦した人の割合が32.9%であることに対し、テレビでスポーツを観戦した人の割合は88.0%にのぼったという。この結果をみれば、「私たちにとって『スポーツを観戦する』ということは、多くの場合、『スポーツをテレビで見る』経験である」という深澤(2010)の指摘²⁾も過言ではないといえよう。当然、ニュース番組や新聞報道からの情報取得、インターネットにおける動画視聴など、実況中継以外の番組やテレビ以外の媒体に視野を広げて考えていけば、現代の人々がスポーツに触れる経験において、いかにメディアが重要な位置を占めているかについては、言を俟たない。

このようなスポーツ観戦の傾向は、パラリンピックにも当てはまる。小林(2018)の調査³⁾によれば、リオデジャネイロ2016パラリンピック競技大会(以下「リオパラ大会」と略す)において「会場での直接観戦」を経験した人の割合は、高い国でもおおよそ10~20%台であることに対して、テレビの「ニュースや選手・競技の特集番組」「大会の中継番組」の視聴を経験した者の割合はおおよそ30%台から、高い国では50~60%台であったとされる。開催国であり直接観戦へのハードルが低いブラジルですら、直接観戦経験者の割合が25.3%であることに対して、テレビによる観戦経験者の割合は60%を超えている。これらの数字によって、パラリンピック観戦経験に占める多くの割合は、メディアを通じた観戦経験であることが示されている。また、このような傾向は、東京2020パラリンピック競技大会(以下、「東京パラ大会」と略す)にも当てはまるものと推察される。東京都(2018)が実施した世論調査⁴⁾によれば、東京パラ大会について、「競技会場(スタジアム・体育館・沿道など)で直接観戦したい」とする回答が18.9%であったことに対して、「テレビ、ラジオ、インターネット配信等で観戦したい」とする回答は63.5%にのぼっている。

こうした観戦傾向を前提とした時、東京パラ大会を盛り上げるという観点からは、「よ

り直接観戦者を増やすにはどうすれば良いのか」という議論が必要とされるが、その一方で、パラリンピックの価値の伝達、社会への影響という観点においては、「メディアを通じてなにがどう報じられるのか」、「その報道を人々はどう受け取っているのか」について議論を深めていくことが必要とされよう。「多様性と調和」がビジョンとして掲げられ、東京パラ大会が共生社会実現のための契機として期待を集めている今、メディアがパラリンピックをどう伝え、それを人々がどう受け取っているのかを読み解く、パラリンピックのメディア研究が重要性を増している。

このような背景を踏まえ、本研究では、はじめに、メディア・スポーツ研究（注1）の基礎的な枠組みに基づき、パラリンピックとメディアに関する従来の研究を整理する。さらに、パラリンピックのメディア研究における「受け手の視点」の不在という課題を補うアプローチとして、NHK放送文化研究所・日本財団パラリンピックサポートセンター共同研究「パラリンピックと放送に関する研究」（以下、「NHK文研・パラサポ共同研究」と略す）（注2）の調査結果に対する分析、考察を通じて、パラリンピック放送に対する受け手の解釈、態度の一側面を明らかにし、その視点からパラリンピックにおける課題を再検討することを試みる。

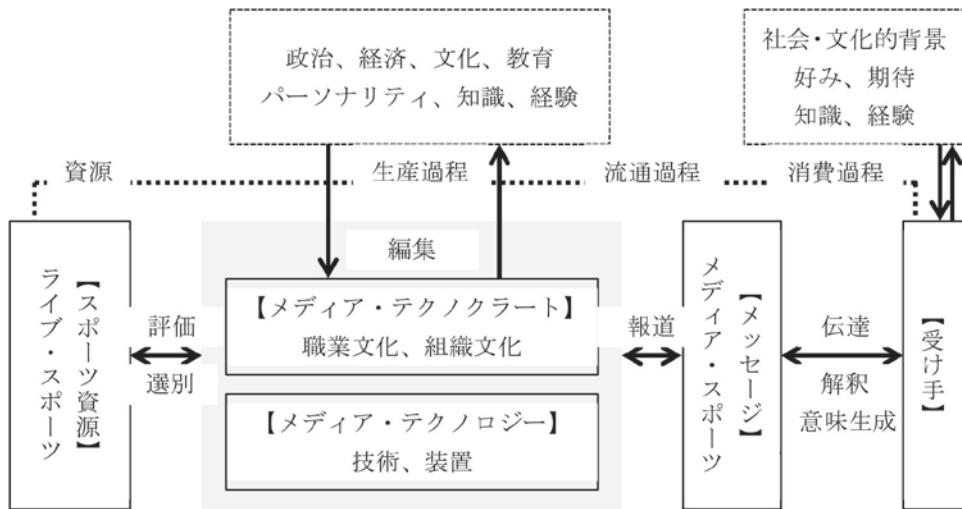
1. メディア・スポーツの構造

はじめに、パラリンピックのメディア研究における成果と課題を体系的に整理するための枠組みとしてとして、メディア・スポーツに関する基本的な構造について、佐伯(2016)の議論⁵⁾をもとに検討する。

メディア・スポーツについて考える際の前提として、「メディア・スポーツは決してライブ・スポーツの忠実なる報道ではない」⁶⁾という点に留意する必要がある。たとえそれがゲームの生中継であっても、カメラによって意図を含んだ一定の視点が切り取られ、実況や解説によって言説が付与されるなど、メディア・スポーツはいかなる場合においても常に「編集されたもの」として人々に伝達されている。

メディアにおける編集は、メディア・テクノロジー（スローモーションやズームなどを含む、撮影・編集機器の機能）にその可能性が規定され、メディア・テクノクラート（文化、編集者のパーソナリティ、社会的規制など、メディア表現を規定する社会的、文化的要素）にその意図が規定される。そして、編集によって生成されたメッセージはメディアの受け手によって消費される。この消費の仕方は、受け手のパーソナリティや社会、文化的背景によって形作られる。以上のような、メディア・スポーツの生産、流通、消費の構造を図式化すると、図1のように整理される。

図1. メディア・スポーツの枠組



(佐伯 (2016) を参照し、筆者作成)

2. パラリンピックとメディアに関する先行研究の検討

パラリンピックとメディアに関する従来の研究は、各パラリンピック大会に関して、その新聞報道の内容について分析を行ったものが中心である。ソルトレークシティー2002パラリンピック冬季競技大会の新聞報道について分析を行った蘭 (2004)⁷⁾は、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞における当該大会の記事量および掲載面について分析し、パラリンピックを社会面やその他の面よりも、スポーツ面で報道することの重要性を指摘した。また、1962年から2012年までのパラリンピックに関する新聞記事を分析した辻ら (2014)⁸⁾は記事数、掲載面に加えて記事の内容を任意のカテゴリに分類して検討し、障がい乗り越えた選手をドラマ風に報じる選手紹介記事が多いことを指摘している。さらにリオパラ大会の新聞報道内容について分析した遠藤 (2017)⁹⁾は、記事の内容をカテゴリに分類し、トーピングに纏わる政治性への言及、競技成績や競技環境への言及、パラリンピックの価値に関する言及などの観点から、それぞれの論調を整理している。

これら諸研究は、上記メディア・スポーツ研究の枠組における「流通過程」へのアプローチとして位置づけられ、パラリンピックがどのように報じられてきたかに関する知見を蓄積してきた重要な研究であるといえる。一方、その着地点は記事の量的な分析やカテゴリ化および若干の考察に留まっており、明らかにされた報じられ方の背後にみえる社会的、文化的な価値や規範、あるいは報道形式や内容がもつ意味作用などについては言及されていない。したがって、パラリンピック言説の生成を規定する諸要因の検討

や、その言説に対する受け手の解釈、意味生成に関する考察など、「流通過程」への局所的なアプローチから「生産過程」、「消費過程」に議論を展開しながら、より構造的にメディアを読み解いていく研究が求められよう。

こうした課題に対して、パラリンピックの報道がどのような価値、規範に規定され、パラアスリートや障がい者の生活にどのような影響を与えるのかに迫った藤田（2002）の研究¹⁰⁾は示唆的である。藤田はアトランタ、長野、シドニー、ソルトレークの4大会における新聞報道のうち、掲載された写真に着目し、パラアスリートの表象について分析した。藤田によれば、パラアスリートに関する写真は、選手の障がい部位を写さないものが中心となっており、その表象のあり方は、「頑張る障がい者」という、健常者を価値基準としながらその価値に同化させていくために障がい者の卓越性を映し出すアプローチであるという。藤田は、こうしたアプローチでは、障がい者の置かれる状況が、身体に対する価値的な優劣の目線、およびその目線から生じる社会的分離から逃れられないことを指摘し、価値の多様化を迫りつつ、同じ社会に存在していく「異化—統合」のあり方と報道の形式を探るべきだと主張する。また、藤田の手法を参照してリオパラ大会の新聞掲載写真を分析した小林（2017）¹¹⁾も、この見方に同調している。

藤田（2002）の研究は、パラリンピアン、パラスポーツという「資源」の特性、およびその「資源」に対する社会的、文化的な価値意識に基づく編集という「生産過程」に対する洞察によって、パラリンピック報道のあり方がもつ意味作用を検討することで、パラリンピック報道に潜む、「身体に対する一元的な価値意識の再生産」という論点をあぶり出した。この重要な論点については、受け手による解釈、および意味生成といった「消費」のフェーズから再検討されなければならない。なぜなら、メディア言説による社会的な価値意識の構築は、メディアによるメッセージ伝達によって一方的、固定的に成立しているのではなく、受け手の文脈に応じたメッセージの理解、解釈、意味付与との相互作用によって動的に達成されるからである。

今日までのパラリンピックとメディアに関する研究において、受け手に焦点を当てた形でメディア言説の解釈について分析した研究は少ない。したがって、まずはメディアの受け手における視聴状況や態度などの基礎的な様相を把握し、その上で、藤田（2002）の議論とすり合わせる必要があるとらう。

3. 本研究の目的

以上の議論を踏まえ、本研究では、平昌パラ大会のテレビ放送視聴者を対象に実施したNHK文研・パラサポ共同研究における調査結果から、パラリンピック放送の視聴状

況、パラリンピック放送に対する認識、態度について検討し、パラリンピックの報道に潜む、「身体に対する一元的な価値意識の再生産」という論点についての再検討を目的とする。

本論考における分析では、視聴者の中でも、とりわけ障がい者によるパラリンピックへの目線に着目する。なぜなら、「身体に対する一元的な価値意識の再生産」という論点は我々の社会が多様な個人をどう包摂していくのかに関する重要な認識的課題であり、このことを論じる上で、その身体性を共有する当事者が、メディアのメッセージに対して何を感じているのかを明らかにすることが非常に重要であると考えられるからである。パラリンピックの放送が、たとえ社会一般としては感動を導くものとして評価されていたとしても、障がい者がその内容に違和感を感じていたり、あるいは身体性を共有するものとして固有な評価をしていれば、その違和感や評価の中に、社会に構造化された、多様な個人の包摂を阻む特定の価値や規範、およびそれらを背景とした社会的課題が潜んでいる可能性がある。なお、本論考は、上記共同研究の調査結果について、日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会の視点から分析、考察したものである。

4. 調査概要

本調査は、平昌パラ大会のテレビ視聴者を対象として、とりわけ障がい者における放送に対する認識、態度など、「受け手の論理」に関する基礎的な様相を明らかにすることを目的とした。調査会社ジーエフケー・インサイト・ジャパンが所有するアンケートモニターより、18歳以上の障がい者1,375名（うち知的障がい者100名については家族による代理回答）、18歳未満の障がい児400名（家族による代理回答）、18歳以上の健常者500名を対象としたウェブアンケートにより、調査を実施した。なお、調査対象者において障がい者に該当する者は、何らかの障がいがあると回答した者のうち、「身体障害者手帳、療養手帳、精神障害者保健福祉手帳などの交付を受けている」者、「手帳の交付は受けていないが、障害福祉の支援サービス・給付を受けている」者、「手帳の交付は受けていないが、医療機関に通院し、治療をしている」者を該当者とした。調査機関は、平昌パラ大会閉会式翌々日からの1週間、2018年3月20日（火）～26日（月）である。本論考では先述のように、パラリンピック放送が内包する「身体に対する一元的な価値意識の再生産」という論点を、障がい当事者の放送受容の様相をもとに再検討するため、上記回答者のうち本人による回答である1,775名（18歳以上の障がい者1,275名、18歳以上の健常者500名）を対象に分析を行った。

5. 調査結果の分析

(1) サンプル特性および全体傾向

①障がい者の障がい種別割合

回答者のうち、障がい者における障がい種別の割合は、表1の通りである。また、今回のサンプル構成比率を国の障がい種別統計データ¹²⁾と比較すると、表1のような乖離が見られた。サンプルは全国の障がい者比率と異なるので、意見の重みを調整するため、障がい種別、年代ごとのサンプル数にかけ合わせる係数である「ウエイトバック値」を算出し、結果を調整した。尚、表章単位未満を四捨五入してあるので、内訳の合計が計に一致しないこともある。

表1. 障がい種別サンプル数と構成比

【障害別WB値】

障害者 (18歳以上)	身体障害	割付 (有効回答数)		今回の調査の 構成比		国の統計に 基づく構成比		WB値
		250	150	18.2%	10.9%	2.8%	2.6%	
		視覚障害	150	10.9%	36.4%	16.6%	0.15570738	さらに細かく年代別 にWB算出 (下記参照)
		聴覚障害	500	36.4%	7.3%	9.3%	0.23717018	
		肢体不自由	100	7.3%	12.7%	11.5%	0.45784157	
		内部障害	175	12.7%	14.5%	57.1%	1.27865663	
	知的障害	知的障害	200	14.5%			0.90505768	
	精神障害	精神障害					3.92562500	
		発達障害						
Total			1375	100.0%	100.0%			

障害者 (18歳未満)	子ども	割付		今回の調査の 構成比		国の統計に 基づく構成比		WB値
		55	83	13.8%	20.8%	14.9%	31.0%	
		262	65.5%	54.2%				
		身体障害	55	13.8%	14.9%	1.081281244		
		知的障害	83	20.8%	31.0%	1.491914706		
		精神障害	262	65.5%	54.2%	0.827101569		
Total			400	100.0%	100.0%			

【身体障害×年代別WB値】

	視覚障害			聴覚障害				
	今回の調査の構成比	国の統計に基づく構成比	WB値	障害別×年代のWB値	今回の調査の構成比	国の統計に基づく構成比	WB値	障害別×年代のWB値
18-29歳	15.20	3.97	0.26141513	0.040704265	8.70	6.52	0.74962519	0.177788742
30代	20.40	7.95	0.38955980	0.060657336	20.00	13.04	0.65217391	0.154676206
40代	24.80	13.91	0.56077761	0.087317213	31.30	14.49	0.46302727	0.109816262
50代	22.00	30.46	1.38470801	0.215609256	22.00	17.39	0.79051383	0.18748631
60代	17.60	43.71	2.48344371	0.386690514	18.00	48.55	2.69726248	0.639710233

	肢体不自由			内部障害				
	今回の調査の構成比	国の統計に基づく構成比	WB値	障害別×年代のWB値	今回の調査の構成比	国の統計に基づく構成比	WB値	障害別×年代のWB値
18-29歳	2.60	5.74	2.20893971	1.011344421	6.00	2.22	0.36962366	0.472621739
30代	8.20	7.09	0.86519446	0.39612199	14.00	4.03	0.28801843	0.36827668
40代	22.00	11.37	0.51699427	0.236701466	21.00	8.06	0.38402458	0.491035573
50代	35.40	28.83	0.81437370	0.37285413	32.00	29.23	0.91355847	1.168127594
60代	31.80	46.96	1.47671256	0.676100395	27.00	56.45	2.09080048	2.673415899

②性別、年代別

回答者の性別割合については、表2の通りである。障がい者に関しては、男性のほうが女性よりも若干多い傾向にあった。

また、回答者の年齢別割合については、表3の通りである（「-」は0を表す）。

表2. 性別割合

	標本数 (人)	男性 (%)	女性 (%)	その他 / 答え たくない (%)
障がい者全体	1275	65.4	34.2	0.4
視覚障がい	250	81.7	17.4	0.9
聴覚障がい	150	69.6	30.4	—
肢体不自由	500	66.0	33.7	0.3
内部障がい	100	80.9	19.1	—
知的障がい	75	61.3	38.7	—
精神障がい	100	61.0	39.0	—
発達障がい	100	63.0	36.0	1.0
健常者	500	50.0	50.0	—

表3. 年齢別割合

	標本数 (人)	～19才 (%)	20～24 才 (%)	25～29 才 (%)	30～34 才 (%)	35～39 才 (%)	40～44 才 (%)	45～49 才 (%)	50～54 才 (%)	55～59 才 (%)	60～64 才 (%)	65～69 才 (%)
全体	1275	0.9	6.1	9.1	7.7	11.7	11.8	14.2	12.3	8.1	8.2	10.0
視覚障がい	250	0.4	2.0	1.6	3.9	4.1	6.7	7.2	19.9	10.5	22.8	20.9
聴覚障がい	150	0.5	2.0	4.0	7.4	5.7	6.2	8.3	9.0	8.4	25.2	23.4
肢体不自由	500	—	2.7	3.1	3.3	3.8	5.0	6.4	14.5	14.3	23.0	23.9
内部障がい	100	—	1.1	1.1	2.6	1.4	3.5	4.6	13.7	15.5	18.8	37.6
知的障がい	75	5.3	14.7	17.3	13.3	21.3	8.0	9.3	4.0	1.3	4.0	1.3
精神障がい	100	1.0	4.0	7.0	7.0	7.0	16.0	22.0	22.0	10.0	2.0	2.0
発達障がい	100	1.0	11.0	17.0	12.0	24.0	16.0	16.0	2.0	1.0	—	—
健常者	500	1.2	4.9	11.5	8.4	10.4	10.9	11.4	10.2	8.7	12.1	10.2

③スポーツ習慣

日常におけるスポーツ活動の有無に関する回答は、表4の通りであった。障がい者と健常者の間に大きな差異は見られなかったが、障がい種別でみると肢体不自由者については、スポーツ実施の状況が他の回答者に比べて低い傾向にあることが示された。

表4. スポーツ実施状況

	標本数 (人)	日常的に行っ ている (%)	たまに行っ ている (%)	ほとん ど行っ てい ない (%)	まっ た く 行っ て い ない (%)	わ か ら な い (%)
障がい者全体	1275	16.5	23.4	20.9	39.3	-
視覚障がい	250	22.0	26.4	21.5	30.0	-
聴覚障がい	150	17.8	30.2	32.0	20.0	-
肢体不自由	500	14.0	17.1	23.4	45.5	-
内部障がい	100	18.5	14.7	30.6	36.3	-
知的障がい	75	22.7	30.7	21.3	25.3	-
精神障がい	100	16.0	29.0	15.0	40.0	-
発達障がい	100	16.0	22.0	21.0	41.0	-
健常者	500	19.9	21.4	19.6	39.1	-

④平昌パラ大会への関心

平昌パラ大会への関心の有無についての回答結果は、表5の通りであった。

表5. 平昌パラ大会への関心

	標本数 (人)	大変関心 がある (%)	まあ関心 がある (%)	どちら とも いえ ない (%)	あまり 関 心 が な い (%)	まっ た く 関 心 が な い (%)	■関心 あり 計 (%)	■どちら とも +関心 なし 計 (%)
障がい者全体	1275	11.0	25.2	25.0	16.8	21.9	36.2	63.8
視覚障がい	250	15.3	31.3	19.3	18.4	15.7	46.6	53.4
聴覚障がい	150	19.6	44.2	17.7	9.4	9.1	63.8	36.2
肢体不自由	500	11.0	31.5	23.3	18.5	15.7	42.5	57.5
内部障がい	100	9.4	32.7	22.9	25.7	9.3	42.1	57.9
知的障がい	75	18.7	25.3	25.3	6.7	24.0	44.0	56.0
精神障がい	100	7.0	21.0	28.0	21.0	23.0	28.0	72.0
発達障がい	100	13.0	21.0	25.0	11.0	30.0	34.0	66.0
健常者	500	6.2	22.1	26.2	19.0	26.4	28.3	71.7

「関心がある」「まあ関心がある」と答えた回答者の割合は、健常者が28.3%であったのに対し、障がい者全体では36.2%と、障がい者の方が健常者より、比較的平昌パラ大会に関心を持っていたことが示唆された。しかしながら、精神障がい者単体で見ると、関心・無関心の割合は健常者のものとはほぼ同じ数値を示しており、ほぼ半数が「関心あり」と回答した視覚、聴覚障がい者などと比較すると大きな乖離があることが示された。

また、「関心がある」「まあ関心がある」とした回答者の中で、関心を持った時期についての回答は、表6の通りであった。

表6. 平昌パラ大会へ関心を持った時期

	標本数 (人)	オリンピックの大会開始以前 (%)	オリンピックの大会期間中 (%)	オリンピックの大会終了後～パラリンピックの開始前 (%)	パラリンピックの大会期間中 (%)	覚えていない (%)	わからない (%)
障がい者全体	573	45.7	22.8	9.1	14.0	8.4	-
視覚障がい	128	51.0	24.5	3.1	16.9	4.3	-
聴覚障がい	92	47.3	25.6	5.0	14.7	7.3	-
肢体不自由	213	46.2	29.4	3.5	14.4	6.6	-
内部障がい	45	39.1	46.5	2.2	10.6	1.6	-
知的障がい	33	30.3	36.4	15.2	12.1	6.1	-
精神障がい	28	39.3	17.9	25.0	14.3	3.6	-
発達障がい	34	55.9	8.8	2.9	14.7	17.6	-
健常者	140	37.0	31.3	8.2	19.3	4.1	-

「オリンピックの大会開始以前」「オリンピックの大会期間中」「オリンピックの大会終了後～パラリンピックの開始前」に関心を抱いた回答者の割合が、障がい者、健常者ともに7割以上を占めており、パラリンピック大会に関心をもつ人の多くは、その大会開始以前から関心を持つ傾向にあることが示唆された。

⑤平昌パラ大会視聴状況

平昌パラ大会の視聴や情報取得に利用したメディアに関する回答は、表7の通りであった。

表7. 平昌パラ大会視聴に利用したメディア（複数回答可）

	標本数 (人)	テレビ（録画視聴なども含む）	ラジオ	新聞	パソコン	スマートフォン端末・タブレット端末	パブリックビューイング	その他	どれも見ていない	わからない
障がい者全体	1275	63.5	6.9	22.9	17.8	14.6	1.7	1.2	27.0	-
視覚障がい	250	68.1	13.1	22.1	18.6	13.2	2.3	2.5	20.5	-
聴覚障がい	150	70.1	7.8	39.3	18.8	20.9	-	0.7	10.9	-
肢体不自由	500	71.2	4.6	26.0	18.5	12.3	0.2	0.4	20.8	-
内部障がい	100	71.0	6.8	26.3	10.6	4.5	2.6	-	19.9	-
知的障がい	75	62.7	9.3	25.3	9.3	17.3	2.7	2.7	26.7	-
精神障がい	100	62.0	7.0	18.0	19.0	19.0	1.0	1.0	30.0	-
発達障がい	100	57.0	7.0	23.0	20.0	14.0	3.0	2.0	32.0	-
健常者	500	62.0	2.6	23.5	14.9	9.5	-	0.2	32.4	-

障がい者、健常者ともに最も多く利用されていたのは「テレビ」であり、全体の半数以上がテレビから平昌パラ大会に関する何らかの情報取得をしていることが示され、パ

ラリンピックのメディア情報に関するテレビの重要性が示唆された。

(2) 「他人事」化について

平昌パラ大会を視聴したとする回答者に対して、その理由について質問したところ、表8の通り、健常者が主に「日本人選手が活躍した」「スポーツとして見るのが楽しい」を理由にあげていることに対し、障がい者に関しては、これらの回答に加えて、「障がい者スポーツに興味がある」「障がい者が努力する姿をみたい」などの理由が、健常者よりも比較的高い割合で回答されていた。しかしながら、平昌パラ大会を視聴していないとする回答者についてみると、表9の通り、「パラリンピック選手は、自分とは遠い存在だ」と認識している人の割合は、健常者よりも障がい者に多くみられる結果となった。

これらの結果から、障がい者におけるパラリンピックに対する二極化した認識を読み解くことができる。つまり、パラリンピックが障がい者にとって「他人事」化されてしまう可能性について、個々人の文脈に規定された認識の乖離という観点から分析する必要がある。具体的には、パラリンピックに参加できる視覚障がい者、肢体不自由、知的障がい者とその他の障がい種別の差異や、その他、個々人を規定する外部要因などを分析していく必要があろう。パラリンピック大会視聴理由によって乖離の様相が可視化されたことを踏まえれば、パラリンピックの視聴態度を規定する要因の中に、その乖離を生み出す因子が含まれている可能性があると考えることができる。

表8. 平昌パラ大会を視聴した理由（複数回答可）

	標本数 (人)	スポーツとして見るのが楽しいから (%)	日本人選手が活躍したから (%)	障がい者が努力する姿を見たいから (%)	障がい者スポーツに興味があるから (%)
障がい者全体	575	32.7	40.2	19.1	18.0
視覚障がい	133	33.8	43.1	16.9	19.2
聴覚障がい	76	35.8	40.5	23.8	7.7
肢体不自由	223	32.9	44.7	26.4	17.7
内部障がい	46	38.6	46.3	22.5	7.5
知的障がい	31	38.7	29.0	19.4	32.3
精神障がい	32	34.4	37.5	15.6	15.6
発達障がい	34	26.5	38.2	14.7	23.5
健常者	175	35.6	45.5	15.0	8.4

※選択肢の一部を抜粋

表9. 平昌パラ大会を視聴しなかった理由（複数回答可）

	標本数（人）	パラリンピック選手は、自分とは遠い存在だから（％）
障がい者全体	289	5.9
視覚障がい	41	—
聴覚障がい	25	12.8
肢体不自由	135	9.2
内部障がい	19	4.1
知的障がい	16	—
精神障がい	30	—
発達障がい	23	13.0
健常者	132	3.3

※選択肢の一部を抜粋

(3) パラリンピック視聴態度を規定する要因の分析

平昌パラ大会に対する障がい者の視聴態度について、「積極的に見ていた」「積極的というほどでもないが、興味あるものは見ていた」とした回答者を「視聴積極的」群、「たまたまやっていたらみることがあった」「興味はなく、ほとんどみていなかった」とした回答者を「視聴非積極的」群、「テレビで見聞きしなかった」とした回答者を「視聴なし」群として、その構成比と障がい種別割合を分析したところ、図2、3の通りとなった。なお、以下の図表に含まれる数値はすべて割合を表し、小数点第1位を四捨五入して整数で記述している。

全体に占める構成比の割合は各群ほぼ同じであり、各群における障がい種別割合を比較すると、大きな差はみられないものの、視聴態度が積極的な群になるほど、肢体不自由者および内部障がい者の割合が多く、精神障がい、発達障がい者の割合が少ないことが示された。

また、各群について、日常生活における積極的な行動のための介助の有無、外出頻度、ボランティアに関する経験・意識などの生活様式を比較すると、図4のような結果となった。

「視聴積極的」群については、日常生活において介助を必要とする割合が高いものの、外出頻度、ボランティアに関する経験・意識も高く、他者と関わることや、外部に対する志向性の高さが示唆される結果となった。

図2. 視聴態度別構成比

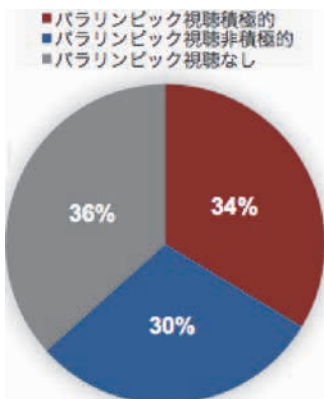


図3. 視聴態度別の障がい種別割合

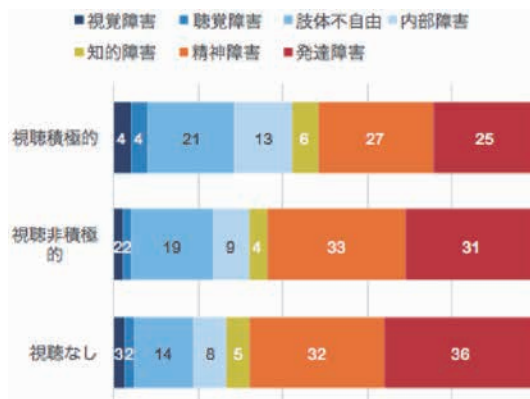


図4. 視聴態度別の生活様式

視聴態度	性別		年代			障害発症時期				介助有無				障害等級				外出頻度	就業率	障害者ボランティア	
	男性	女性	29才以下	30-40代	50代以上	生まれたときから	～9歳	10歳以上	不明	*全能的に + 一部介助を受けている	家の中での行動	買い物・病院などでの外出	情報を見る・聞く・操作すること	重度	中度	軽度	等級不明	手帳交付なし	*よく出かける方だ	*よく出かける方だ	*積極的に活動している
視聴積極的	76	24	14	37	49	11	65	14	17	23	12	20	20	20	40	44	59	69			
視聴非積極的	58	42	17	46	37	16	60	15	10	13	4	14	30	25	30	42	55	39			
視聴なし	62	37	17	53	30	17	60	20	9	15	4	11	32	23	4	36	26	58	27		

また、各群におけるスポーツ活動の状況等を比較すると、図5の通りとなり、「視聴積極的」群における活発なスポーツ活動状況が明らかとなった。

(4) 自由記述に関する分析

「パラリンピック放送を通じて感じたこと」に関する自由記述回答について、「視聴積極的」群において積極的に視聴した理由、また、「視聴非積極的」群において視聴に積極的になれなかった理由について言及があった回答のうち、特徴的な言説を分析したところ、図6、7のような記述が抽出された。

「視聴積極的」群において、パラリンピックを積極的に視聴した理由については、「困難を乗り越えながら競技に取り組む選手たちを見て、感動した。……自分もできること

図6. 「視聴積極的」群における積極視聴の理由

視聴積極的	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じような境遇の中で、その困難を乗り越えながら競技に取り組む選手たちを見て、感動した。自分もできることから始めてみようと思った。【視覚障害】 ・ 障がい者になって初めて見たパラリンピックだったので、関心を持って見た。選手は皆、障がい者になった時、なぜと悲しみとショックを感じたと思うが、競技に向かう姿はひたむきで明るく自分にとっても励みになった。【聴覚障害】 ・ 自分は最近障害者になったのですが、自分もなにか打ち込める事柄を見つけられたいと思った。また、障害があってもハンデとも思わずに努力を続けているであろうアスリートを見習いたいと感じた。【肢体不自由】 ・ それぞれ障害や困難を抱えながらも、アスリートとして努力し、世界で活躍する選手の姿を見てとても励みになった。【肢体不自由】 ・ 障害を乗り越え、過酷な訓練やたゆまぬ努力を続けてこられた選手の方々に敬意を感じた。障害は、何らかの道・手段で乗り越えられという勇気を得られた。【肢体不自由】 ・ 障害というハンディを乗り越えて、競技者として世界の舞台に立つということだけでも素晴らしい。勇気もらったし、自分ももっとリハビリに励まなくてはと思った。【肢体不自由】 ・ 日頃、こればできないな、とか、多分ダメだろう、などと諦めてしまうことが多いのですが、やはり勇気とか簡単に諦めない気持ちとか、そういう前向きな気持ちをもらえるとと思いました。【内部障害】 ・ なんの努力もせずいた自分が恥ずかしい！出来ることからやるを教えられました。【知的障害】 ・ 障がいがあっても前向きに必死に努力している姿を見て、私も頑張ろうと思いました。【精神障害】 	

図7. 「視聴非積極的」群における非積極視聴の理由

視聴非積極的	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分も視覚障害者だが、スポーツが苦手なので活躍している選手をうらやましく思った。【視覚障害】 ・ 環境に恵まれてる人たちの競技かな。【視覚障害】 ・ 障害があっても恵まれている人とそうでない人とのギャップは大きい。【聴覚障害】 ・ 選手の経済的環境に大きく影響される。【聴覚障害】 ・ パラリンピックに出るような選手は金銭的に恵まれているのではないかなと思う。【肢体不自由】 ・ 障害者ががんばっていることに勇気もらう、って何目線なのかと思う。自分は、周りにこれ以上迷惑をかけたくないし大変な思いをしたくないので、怪我をするようなことをあえてしようとは思わないけれど、その危険を冒してでもやりたいことがあるのは幸せなことだと思う。【肢体不自由】 ・ 自分自身のやりたいことに打ち込める環境ではないので全く別世界【肢体不自由】 ・ 自分ももっと若かったら、挑戦したかった。【肢体不自由】 ・ 自分の障害ではスポーツをほとんど行うことができないので、縁遠い存在であり、ほとんど目にしていません。【肢体不自由】 ・ 先進国のほうが参加人数が多く、紛争地域や貧困問題を抱える国などの参加者は少ないようで、国の社会的状況や選手個人の金銭的な面、それに支援者の有無などによって、オリンピック以上に国や選手の格差を感じさせ、障害者スポーツは障害者の誰もが気軽に行えるようなものではないと感じた。【精神障害】 	

から始めてみようと思った」や、「ハンディを乗り越えて競技者として世界の舞台に立つということだけでも素晴らしい。勇気をもらったし、自分ももっとリハビリに励まなくてはいけない」といったように、主に「障がい乗り越える姿」に「感動」し、「自分も頑張ろうと思う」という解釈パターンが特徴的であった。一方、「視聴非積極的」群においては、「経済的環境に大きく影響される」「自分自身のやりたいことに打ち込める環境ではない」など、主に「自らの置かれた環境」と選手たちの姿の間に「ギャップ」が生じており、そのことが視聴に積極的になれない要因の一つとなっている可能性が推察される(注3)。

(5) 分析結果のまとめ

ここまで行った分析結果の要点をまとめると、以下の通りである。

- ① 障がい者におけるパラリンピックの視聴態度は、「自分事」として積極的に視聴する人々と、「他人事」として視聴に積極的でない人々の二極化傾向にあることが示唆された。
- ② 視聴の積極性を規定する要因として、「外部との関わりに対する状況や志向性」「スポーツ活動状況」「障がいという枠組みに対する意識の差異」などが想定された。
- ③ 視聴に積極的な人々は、障がいという枠組みをより意識化した状態で、選手が障がい乗り越える姿に感動し、自らを同化し、努力するための原動力としてパラリンピック放送を受容している傾向にあることが示唆された。
- ④ 視聴に積極的でない人々は、自らの置かれた境遇と選手の境遇にギャップを感じたり、障がいという枠組みを意識していない、あるいは意識的にその枠組を排除することなどによって、パラリンピックを「他人事」として位置づけている傾向にあることが示唆された。

5. 「受け手の論理」からみた身体に対する一元的な価値意識の再生産について

最後に、本研究における分析結果を踏まえて、藤田(2002)¹³⁾が提示したパラリンピック報道における身体に対する一元的な価値意識の再生産という問題に対して、「受け手の論理」から再検討を試みる。

本研究の分析結果から見えた、メディア視聴態度の積極性に対する差異は、障がい「乗り越える」というストーリーに対する距離感によって規定されている可能性が推察された。このストーリーに感動し、自分の境遇を重ね合わせることができる障がい者は、パラリンピック視聴に、より積極的な態度を示しており、逆に、環境要因や経済的要因、

パーソナリティなど、個々人が埋め込まれた文脈においてこのストーリーに距離を感じる障がい者にとって、パラリンピックは「他人事」となっているのではないかという視点が導かれよう。この「乗り越える」というストーリーこそ、まさに身体に対する一元的な価値意識によって生じている価値基準であるとみることもできる。藤田（2002）が障がい者スポーツにおける健常者中心の価値体系への「同化—統合」の様相を示したように、障がいのない身体こそが健全であり、障がいのある身体は相対的に劣等であるという価値意識が前提にあるなかで、障がいを「乗り越える」という論理に価値がおかれることで、そこで生じる卓越性のベクトルは、相対的に優秀で健全とされる健常者の身体への統合に向かうものとして定められる側面があるのではないだろうか。そういう意味で、本研究において見えてきたパラリンピックに対する視聴態度の差異は、本質的には、こうした一元的な価値意識を受け入れるかどうかによって規定されているとみることもできるだろう。パラリンピックに積極的な視聴態度を示さない障がい者は、障がいという枠組に対する意識化の度合いが低い傾向にあるという分析結果は、このことの証左であるとみることもできる。なぜなら、この構造において、自身の身体に価値的な優劣をつけず、絶対的な一身体として素朴に認識している人は、「乗り越える」というストーリーに違和感を感じたり、自分の意味世界とは離れたものとしてみている可能性があるからである。

しかし一方で、「乗り越える」という言説は必ずしも「障がいのある身体を『乗り越え』、健常者の身体に近づく」という価値一元的な意味ではなく、むしろ障がい当事者にとって「自己に固有な身体が新たな地平を拓く」という、「絶対的な身体観」の現れであるという解釈も可能である。この場合、パラリンピック放送の受容は、身体に対する一元的な価値意識を解体し、個々を尊重した身体への目線を生み出す可能性をもったものであるとみることができよう。

以上のように、藤田（2002）が「身体に対する価値基準が多様化されない限り、それを満たそうと努力できる人以外のスポーツ参加は阻害される」¹⁴⁾と指摘したことを、改めて「受け手の論理」に当てはめると、そうした価値意識の再生産装置に陥る可能性と、新たな価値意識への扉を拓く可能性を内包しているパラリンピック放送の両義的な性格が見えてくる。こうした点を踏まえて、これまで構造化されてきた身体に対する一元的な価値意識を揺さぶり、再生産の過程において少しずつ価値の多様化に向けた変動を導くためには何が求められるのかという難題と格闘していく必要があるだろう。

注

- (1) 本稿におけるメディア・スポーツの概念は、佐伯（2006）の定義に準じ、「メディア・エージェントによってメディア商品・製品として編成され、消費されるスポーツ情報」とする。

- (2) 具体的な調査の内容および質問紙の構成については、日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会のホームページ「パラリンピックと放送に関する研究」
<http://para.tokyo/2018/08/post-30.html> を参照。
- (3) それぞれの言説は、視聴態度ごとの認識の特性を炙り出すため、視聴態度に関連すると推察されるものを抽出しているため、この傾向が一般的なものであるとはいえない。その為、この結果から導かれる推察は、あくまで今後の分析視点を検討する上での一観点して理解する必要がある。

引用参考文献

- 1) 笹川スポーツ財団, 2016, 『スポーツ・ライフデータ2016—スポーツライフに関する調査報告書—』, 92-99.
- 2) 深澤弘樹, 2010, 「スポーツ中継のなかの『物語』—メディアの送り手による構築—」, 橋本純一編『スポーツ観戦学—熱狂のステージの構造と意味—』, 世界思想社, 162.
- 3) 小林尚平, 2018, 「リオ2016大会後におけるパラリンピックに関する認知と関心」, 『パラリンピック研究会紀要』, 8, 37-71.
- 4) 東京都, 2018, 『オリンピック・パラリンピック開催, 障害者スポーツに関する世論調査』, <http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/01/30/01.html>, (2018年4月28日).
- 5) 佐伯年詩雄, 2006, 『現代スポーツを読む—スポーツ考現学の試み—』, 世界思想社, 260-263.
- 6) 同上, 260.
- 7) 蘭和真, 2004, 「ソルトレークシティーパラリンピックの新聞報道に関する研究—朝日新聞, 毎日新聞, 読売新聞の記事分析—」, 『東海女子大学紀要』, 23, 13-19.
- 8) 辻はるか, 上地勝, 2014, 「日本におけるパラリンピックに関する報道の内容分析」, 『茨城大学教育学部紀要—教育科学』, 63, 499-508.
- 9) 遠藤華英, 2017, 「リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察」, 『パラリンピック研究会紀要』, 7, 31-40.
- 10) 藤田紀昭, 2002, 「障害者スポーツとメディア」, 橋本純一編『現代メディアスポーツ論』, 197-217.
- 11) 小林尚平, 2017, 「リオデジャネイロパラリンピック大会の新聞報道分析—新聞報道写真と掲載面に着目して—」, 『パラリンピック研究会紀要』, 7, 41-51.
- 12) 内閣府, 2016, 「平成28年度版 障害白書」, <http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h28hakusho/zenbun/index-pdf.html>, (2018年5月30日).
- 13) 藤田紀昭, 前掲書.
- 14) 藤田紀昭, 前掲書, 212.

Study of the Paralympics and Broadcasting (2) — Research on “Reproduction of a Uniform Sense of Value the Human Body” given by Paralympic Broadcasting —

Kenjiro NAKAYAMA

Through analysis and examination of the results of *Study of the Paralympics and Broadcasting*, a joint study conducted by NHK Broadcasting Culture Research Institute and the Nippon Foundation Paralympic Support Center focusing on interpretations and attitudes of persons with disabilities in regard to the broadcasting of the PyeongChang Paralympic Games, this study aims to shed light on one aspect of the “logic of the receiver” in regard to broadcasting and, based on this logic, to reexamine the issue of “reproduction of a uniform sense of value of the human body” discussed in research to date.

There is an abundance of knowledge concerning media research of the Paralympics, particularly on analyses of content reported by newspapers. While quantitative analyses and the categorization of articles have been conducting, this research has indicated the possibility of the reproduction of “a uniform sense of value of the human body” where the body of an able-bodied person is regarded as a sound body, and a body with a disability is in a relatively inferior position. Until now, this point at issue has been analyzed through approaches to resources, production processes, and distribution processes within the structure of media. The concept of sense of value, however, is not formed by the media in a fixed manner. If we adopt the viewpoint that it is constructed dynamically in a mutual relationship of the receiver’s interpretation and attitude, we can assume that this issue should be reexamined in light of analyses of interpretations and attitudes of media receivers. Furthermore, even in the context of “logic of the receiver,” there is a possibility that sense of value unconsciously structured in society through approaches from the viewpoint of persons with disabilities can be determined in regard to Paralympics broadcasting.

Results of the survey suggested that attitudes of persons with disabilities toward

broadcasting of the Paralympics had a tendency toward bipolarity between those who identified with Paralympic Broadcasting and Paralympian those who felt the games did not pertain to them, and also suggested the possibility that differences in awareness of social frameworks such as external relationships, aspirations, status of participation in sports activities and disability determined viewing attitude. Furthermore, the bipolarity of viewing attitudes manifested itself as a difference in interpretation of the view of “overcoming” disabilities.

If we consider the premise that the body of an able-bodied person is superior in value as leading to the formation of a concept of “overcoming disabilities, we can infer from results of the survey that when persons with disabilities accept a “uniform sense of value of the human body,” they might view broadcasting of the Paralympics as pertaining to themselves.

Adopting this viewpoint, the indication that broadcasting of the Paralympics reproduces “a uniform sense of value of the human body” is appropriate. However, it was inferred that it was possible to view “overcoming” as not necessarily the value of ‘ “overcoming” the inferior body of a person with a disability and becoming more closely approximated to the body of an able-bodied person’ in a uniform sense, but rather as a manifestation in a person with a disability of an “absolute body outlook” involving the “creation of a new horizon for that individual’s unique body.”

Examining whether media views and statements, which have traditionally been indicated as being able to reproduce a uniform sense of value of the human body from Paralympic media coverage, can effect change in such systems and senses of value is an important task for future investigation.